

# 多様な社会人と実践的に学べりベラルアーツ教育の効果検証

畠 一樹

(徳島大学高等教育研究センター・キャリア支援部門)

## 1. はじめに

VUCA時代では変化が急速で予測が難しくなり、社会変容へのアジャイルな対応が重要度を増す。このような時代においては、社会に呼応した個人の変容や多様性が求められ、自分自身の判断基準がより一層求められる。この判断基準を備えるためには、多様な属性をもつ社会人と関わるリベラルアーツ的な教育環境で実践的な知性を養うことが効果的であると考えられる。さらに、コミュニケーションスキルは学生と社会人双方の立場から重要度の高いスキルとして位置づけられている。このような背景から、2022年度より教養教育で新たな科目「コミュニケーション入門」を開講した。本研究では、授業の特徴と教育効果の検証結果を報告する。

## 2. 授業の概要

### (1) 受講する環境

本科目は2022年度前期から開講された教養教育科目であり、選必修区分は選択科目、履修者数は28名であった。本科目の開講にあたり、学内外の社会人から高い共感を得ることができたことで、講師やゲストスピーカーとして多数のご協力を頂けることになった。最終的に授業にかかわった社会人の延べ人数は101名となり、履修生が実社会を臨場感をもって学べるリベラルアーツな教育環境を創出できた。

### (2) 到達目標

人と関わるマインドセットとコミュニケーション能力の開発を目的とした。本科目の到達レベルとしては正課外活動につながる「やってみる」に設定し(図1)、図2に示す授業計画で実施した。

### (3) 期待する効果

上記の到達目標にアプローチすることで期待される効果としては、以下の3点が挙げられる。

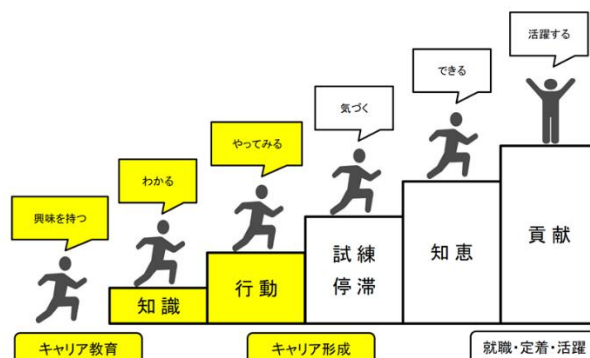


図1 成長の階段

1	オリエンテーション	<b>授業の骨格</b> ①思考・感覚を柔軟にする ↓ ②自分らしさを表現する ↓ ③共感し、他者とつながる ↓ ④主観から客観へ ↓ ⑤学びから体験へ ↓ ⑥振り返り・内省 (リフレクション) ↓ ⑦正課外への実践 (体得) へ
2	コミュニケーションの意識	
3	ゼロベース思考	
4	視座の転換	
5	講義の言語化	
6	共感とエンゲージメント	
7	チームビルディング	
8	スチューデントEQ (SEQ) の解説	
9	前半の振り返りと後半へのマインドセット	
10	SEQ目標づくりシートの作成	
11	社会人とのコミュニケーション1:基礎編	
12	実践で浮上した課題と解決策の検討	
13	社会人とのコミュニケーション2:応用編	
14	SEQ目標づくりシートの修正と完成	
15	総括(全体の振り返りと今後のマインドセット)	

図2 授業計画

- ①未経験による不安感などから実践行動に踏み込めない課題を克服して、「できるかもしれない」といった自己効力感や成長をセルフマネジメントする意欲をマインドセットする。
- ②マインドセットの根拠となるスキルの体感や獲得を多様な社会人と学びながら実現する。
- ③コミュニケーション能力の開発を「やってみる」から「できる」、さらには「活躍する」段階まで持続的に成長する期待が高まる。

### (4) 授業の特徴

本科目では、コミュニケーション能力の本質を踏まえながら、その能力を開発するにあたり知性

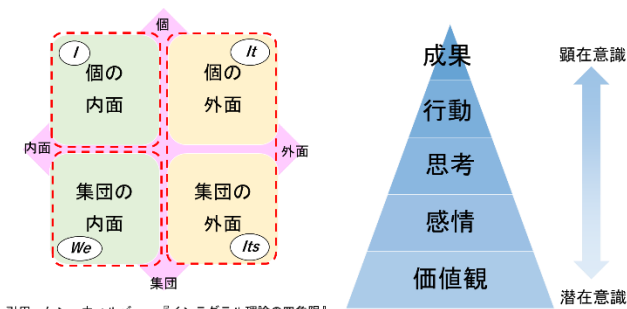


図3 全体性の確保と潜在意識の意識

的な顕在意識の領域で外面と内面を学ぶだけではなく、感情や感性を鍛錬し、自己理解を深めながら価値観を意識するなど潜在意識の領域まで学びを深めた（図3）。

### 3. 授業効果の検証

#### (1) 気づきの促進および気づきデータの収集

15回の授業毎に受講生が授業を振り返りながら得られた「気づき」を言語化し、学習管理システム（manaba）に250～300文字で要点を簡潔にまとめて入力したものを検証する。気づきの入力の際のねらいとしては、①リフレクション、②ジャーナリング効果、③アプトプットの促進、④インターンシップや就職活動に向けたトレーニング、⑤アジャイルな授業改善などが挙げられる。

#### (2) 気づきの検証

気づきの内容を検証して得られた授業効果を以下に列挙する。

- ①視野拡張：多様な属性の人とのコミュニケーションによって、自分とは違う視座から物事を捉えることで視野が拡張され“ゆらぎ”が生じる。これによって新たな気づきが誘発される。
- ②先入観：視野拡張を実感したときに、自分自身の先入観や思い込みなどが思考や行動を制限していたことの気付きが得られる。
- ③心理的安全性：先入観が解消されることによって、不安や恐れも希薄化して物事の解釈が柔軟になり、心理的安全性も形成しやすくなる。
- ④言語化・概念化：相手の話を簡潔にまとめたり、思ったことを上手く伝える言語が出てこないときがある。言語化・概念化が容易にできるように

なると授業の効果はより向上する考えられる。

⑤自己理解：自分の個性を意識するようになる。強みや弱みなど外面的なところに加えて、感情や価値観など内面にも注目するところが伺える。比較的ネガティブに捉える傾向があり、弱みは意識しやすいが、強みは意識しづらい傾向がある。

ここに、評価手法は自己評価に加えて、SEQ検査やVIA診断など信頼性を確保した客観的評価も取り入れている。

⑥精神性・社会性：内省したり、他者からの指摘を受けることによって、自己理解が深まり、自分の大切にしている価値観にたどり着く。さらに、他者との交流に前向きになり相互扶助の関係構築など社会性が高まる。

⑦実体験と紐づけ：自分自身の実体験と授業のワークが紐づいたときに、自己理解を深めることを助長する。

⑧自己肯定感・効力感：心理的安全性が確保されることによって、失敗をポジティブに受け止められるようになるなどチャレンジ精神が育まれ、小さな挑戦が生まれる。その挑戦を承認されることで更に自己肯定感・効力感が高まると考えられる。

⑨サポート：自律的に成長する場面や、サポートを要する場面もある。また、人やタイミングによってサポートの要否も変わる。

⑩実学への意欲：自己肯定感・効力感の高まりから、正課内だけにとどまらず、正課外での実践意欲が形成される傾向がある。

### 4. 今後の展望と課題

今回の気づきや授業評価アンケートより、学生から一定の満足度を得ていると考えられる。また、正課内だけではなく、授業で得た社会人と御縁から会社見学など正課外のアクションにもつながるなどセルフマネジメントが始まっている。

一方で、新型コロナウイルス感染への配慮から対面授業の割合が少なかったこと改善や、キャリア教育からキャリア形成へと成長を昇華するうえで、大学内のキャリア支援室をはじめ、学内外の社会人との連携支援をより一層強化したい。